

シンガポールにおける都市コミュニティと社会的景観

——都市人類学からのアプローチ——

糸 林 誉 史*

Urban Community and Social Landscape in Singapore

——From an Urban Anthropology Approach——

Yoshifumi Itobayashi

要 旨 近代化とは集団や地域が第三の領域としての都市を通じて結びついた場所の秩序であった社会が、物質的にも、理念・想像的にも、そして遂行的にも、国土と国内市場という巨大で均質な連続空間へと変換されて、その巨大な空間の中を身体・物財・情報が自由に流通する場として再編されていく過程であった。現在の都市人類学では、都市を一つの完結した場として捉えるのではなく、また農村や地域、国家、超国家などと切り離すのではなく、そうした空間の諸相とともに生きられ、それらとの関係を通じて構成されるものとして捉える視点が台頭してきている。シンガポールにおいてHDB（住宅開発庁）によって1960年に着手された全国公共住宅プログラムが、カンブン居住者をつぎつぎと高層住宅団地に再定住させた結果、人々の日常性に大きな変換が生じた。それは空間の「画一化」、「均質化」や「場所性の喪失」であり、1990年代初めにはカンブンへの郷愁をめぐってストレスの政治化という問題が大きな議論を生んだ。本稿ではこうした事例を手がかりに、近代化と社会的景観論およびアメニティ論について都市人類学の視点からのアプローチを試みる。

1 はじめに

現在の人類学分野における都市研究の特徴は親族への言及がほとんど見られないことである。このことは都市人類学創生期のイロコイ、トロブリアンド島、ヌエル研究の頃にみられた親族やクランへの着目とは対照的に、現在では親族関係を超えた社会組織を対象とすることが都市の複雑化した生活へのアプローチとなっている。おもな研究テーマとしては、移民、社会的ネットワーク、ストリートコーナー、近隣関係、政治過程、交易と企業、自発的アソシエーション、宗教会派、都市の儀礼、社会運動などの大きな広がりがある。

本稿ではシンガポールを事例として、都市コミュニティの空間の変容を社会的景観の問題として捉え、1965年の独立共和国成立直前の1950年代と90年代との対比によって日常性の変換を見てみる。次に、ストレス問題の政治化をめぐり近代の都市景観の画一化や均質化、そして場所性の喪失という現象を検討する。さらにアジアの価値観がそうした社会病理を解決する手法として政府が採用する過程を見ながら、近代性と社会的景観論およびアメニティ論について考察してみたい¹⁾。

2 都市人類学の視点

都市における人類学的な調査は1930～40年代に、ラドクリフ＝ブラウン、マリノフスキーらの社会人類学者によって始まった。それに続い

* 本学講師 文化人類学

てロイド・ワーナーのヤンキー・シティやシカゴ研究、ロバート・レッドフィールドのユカタン研究、ウィリアム・ホワイトのボストン研究、ゴッドフライ・ウイルソンのザンビア研究、エレン・ヘルマンらの南アフリカ研究などが参与観察による民族誌法によって行われた。これらはロバート・パークに始まる初期シカゴ学派の都市生態学の影響を強く受けていたことは知られているが、同時にヨーロッパや北米、東アジアにおける農民・村落研究から着想を得たものであった。しかし一連の研究は、いわば「都市における」人類学であり、従来の伝統的なトピックを都市環境に持ち込んだものが多かった。そのため「都市の」人類学として一つの領域を形成するまでには至らなかった。

ロンドンのコミュニティ・スタディ研究所における都市計画プログラムは、ロンドンのスラムとナイジェリアのラゴスの研究から、都市の構成を拡大家族と親族ネットワークからなる都市コミュニティとして理論化した (Young and Willmott 1957)。またタビストック人間関係研究所からはイギリス中流家族の社会的ネットワークを研究したボットの著書が発行されてマンチェスター学派の人類学者の間で議論を巻き起こした (Bott 1957)。

こうしたイギリスにおける都市研究の隆盛を受けて1950年代半ばからマンチェスター学派の人類学者はザンビアのリビングストーン研究所を活動の拠点とした中央アフリカの民族誌的な研究を精力的に行うようになった (Mitchell 1969)。1960年代初めにはその成果が文化人類学者の注目を集めるようになり、「都市人類学」という言葉が頻繁に印刷物において使用されるようになった。この時期には農村から都市への移住、都市適応、エスニシティ、貧困の文化といった問題がルイス (1968) やハナーズ (1969) によって論じられて注目を集めた。

1972年から“*Urban Anthropology*”が学術雑誌として発行されるようになった。伝統的な人類学の基調テーマである「未開 (primitive)」の強調、およびそこからの複雑で産業的な社会

の排除に対する反動が都市人類学の台頭の背景としてあった。またすべての文化は近代世界の一部であって、孤立した独立した実体ではないという文化の概念をめぐる大きな転換があったことが指摘できよう。社会的背景としては、20世紀の都市がかつてない速度と規模で拡大している現実があった。

このように1970年代には都市人類学は文化人類学の一つの領域として広く認知されるようになった。また学生向けの最初のテキストも現れた (Fox 1977 ; Basham 1978)。学会においても1979年にアメリカ人類学協会 (AAA) の一部門として都市人類学会 (SUA) が結成された。

次に全盛期を迎えたこの時期の学説史上の特色としては、トップダウンとボトムアップの2つのアプローチが競い合ったことであった。まずトップダウン型では、リチャード・フォックス (1977) が、アーバニズムの観点から歴史的な都市の類型論を展開した。またアーバニズムの人類学として、都市と農村の交差という視点から米国の研究者は南米で、英国の人類学者はアフリカ研究において領域を切り開いた。次にボトムアップ型では、クリフォード・ギアツが、サブカルチャー、都市への移動を扱うアーバニゼーションの観点から、都市村落と階級文化に関する都市居住民の近隣関係の民族誌を記述した。

多くの研究者は第三世界を対象として都市人類学の研究を進めてきた。その多くは「都市農民」の適応機能、彼らのエスニック・アイデンティティについて親族や自発的アソシエーションの関連から論じたものであった。この時期に共通するのは、アーバニズムそのものに直接に研究の焦点を合わせることは少なく、都市のより小規模な社会単位に対して伝統的な人類学の方法論を適用し、過去との連続性を見出したことであった。

ところが1980年代になると都市研究の問題設定および方法論において新たな動きが見られた。トップダウン型では、アンソニー・リーズ

(1994) がブラジルとポルトガルを事例に地域レベルを越える徴税、貿易、土地所有、労働市場、軍事力などの権力分析によって労働、商品、資本、サービス、情報の流れから地域との関連で国民国家レベルの分析を展開した。一方、ボトムアップ型では、ハナーズ (1980) が個人が都市化の状況によって様々な資源を再配分する行為や意識の過程を、生産、世帯・親族、余暇、近隣、交通の5つの領域ごとに分析した。学説史的には従来の社会組織の分析からポリティカル・エコノミーの分析が支配的な理論上のパラダイムとなった。多くの研究者は産業資本の視点の導入することで都市の不平等や疎外を研究して、都市研究のアーバニズム論の混乱と不毛を再構築しようとした。

最後に1990年代の都市人類学は、都市環境をコード化されたテキストと見なす表象研究が現れた (Jacobs 1993)。また人種・マイノリティ、ジェンダー、セクシャリティ、ライフサイクル、医療、健康・福祉、ポピュラーカルチャー等が新たな研究テーマとして台頭してきた。引き続き都市の貧困問題が着目されたが、新中間層やエリート層が、政策の決定過程とともに研究されるようになった。

こうした研究の深化と広がりを受けて都市人類学会は、都市・国家・超国家人類学会 (SUNTA) と名称を変更して今日に至っている。それは都市を一つの完結した場として捉えるのではなく、都市を、農村や地域、国家、超国家との連続として、そうした空間の諸相とともに生きられ、それらとの関係を通じて構成されるものとして捉える視点が台頭してきたことを意味している。

3 近代化と都市コミュニティ

近代化とは集団や地域が第三の領域としての都市を通じて結びついた場所の秩序であった社会が、物質的にも、理念・想像的にも、そして遂行的にも、国土と国内市場という巨大で均質な連続空間へと変換されて、その巨大な空間の

中を身体・物財・情報が自由に流通する場として再編されていく過程であった (若林 2000: 163)。ヴェーバー (1964: 3-4) が指摘した近代以前の都市の特徴である住民相互の人的な相識関係の欠如や市場的な交換関係、自治的な法共同体としての性格などは、今日では都市を他の社会の領域から区別する属性とはならず、むしろそうした属性は全体社会としての国民社会や国際社会においても一般に見られる連続した均質な属性となった。ここではシンガポールにおける都市コミュニティの日常性の変換を事例に見てみたい。

HDB (住宅開発庁) によって1960年に着手された全国公共住宅プログラムは、カンブン (村落) 居住者をつぎつぎと高層住宅団地に再定住させ、1989年頃までに全国のカンブンのすべてが取り壊された。しかしマレー語で村落を意味するカンブンは、シンガポールの人々の記憶のなかで生きつづけている。

「コピ・ティエム (珈琲店)」というマレー語と福建語の混成語はシンガポールの人々にとって特別な響きをもっている。現在訪れることのできるコピ・ティエムは、MRT シティ・ホール駅そばの超高層ホテル、ウェスティン・スタンフォードの二階にある近代的な喫茶店である。ネクタイをしたビジネスマンが商談を行い、中産階級以上の似たようなライフ・スタイルの人々が集うコーヒーショップは、ローカルフードのラクサやチキンライスを売り物にしているが、シンガポールの大衆文化を象徴するかつての安食堂のコピ・ティエムではない。だがサンダル履きのショートパンツ姿で一日を過ごしたかつての日常性の記憶は、コピ・ティエムの言葉によって容易に人々の脳裏によみがえってくる。このコピ・ティエムという言葉が媒介する二つの全く異なった日常性の変換、すなわち都市の村での生活と公共住宅団地での生活を、1950年代末と1990年代の生活の対比によって見てみたい²⁾。

社会学者チュア・ベンフォア (1995: 81-87) の記憶から、1950年代末のカンブンでの日常に

ついてみる。彼の育ったブキッ・ホースィーは、植民地政府によって建てられたティオン・バルの近代的な団地に隣接したまさに都市の村であった。村のある小さな丘陵に沿って、トラックが頻繁に行き交う舗装された二本の道路がT字型に交わり地域を横切っていた。舗装されていないわき道の路地には、波上の亜鉛トタンかアスベストの屋根を持つ木造家屋が密集して立ち並んでいた。雑貨屋、食料品店、床屋、薬局など日常生活を商う店が密集した家々の合い間に点在していた。こうした商店は婦人とその子供たちによって商われ、夫は村の外で仕事を持っていた。華人の記憶にある大家族が見られたのは彼らの間であった。

自己所有の住宅は単純な造りではあるがガラス窓から十分な明かりが家の中に射し込み、風通しもよかった。賃貸の住宅はそれとは反対に、寝室が一つ居間が一つで、小さな台所はあるが、天井は低くて窓はなく、光と換気のためにドアを絶えず開け放つ必要があった。どの家も薄暗さのためオイルランプが一日中点けられていた。トイレは屋外で共同だった。家畜が飼われる路地は、ふんのおいとトイレの悪臭がただよい、夕方にはそれに料理のにおいが混ざった。

賃貸住宅の住民の間では失業と不完全雇用が一般的であった。定職を持たない成人男性および寡婦、失業者を抱えた家族は、日銭を求めて不安定な肉体労働、人力車引きや港湾労働、建設労働、家政婦などのきつい仕事に従事していた。十分な稼ぎ手に恵まれない家庭の主婦は小売店の店主からのツケでなんとか家計をやりくりしていた。厳しい労働のため体調を崩し結核で寝込む姿も珍しくなかった。

こうした住民のうち初等の英語教育の受けたものが行政との窓口となって地域レベルでの影響力を持っていた。この時期、英語教育の重要性は人々の間に十分に浸透していた。多くの戦後のベビーブーム世代の子供たちは英語学校に通っていた。だが中等教育レベルまで進めるのは、ほんのわずかであった。カンブンでは公的

な教育システムからはみ出した子供たちのための私設の小学校が、地域出身の成功した実業家の資金によって設立されていた。人々が共同でものごとにあたったのは私設学校の運営のほか、道路舗装の修繕、寺院の維持、宗教的な祝祭、そして地域の防犯と防火などであった。失業者が時間を持て余していたカンブンでは、こうした人材に事欠かなかった。

地域の中心であるT字路の交わるところに、コーヒーショップのコピ・ティエムがあった。店先は道路に面して大きく開き、イスとテーブルが道路まではみ出して並べられ、ちょうどそこは大きな木の木陰になっていた。いつも数人の男性とティーンエージャーがそれぞれのグループごとに別れて集まってきた。中国語の読み書きができる人は新聞記事を聴衆に向かって大きな声で読み聞かせた。ニュースはすぐに良いか悪いかで聴衆に判断された。共通するのは中国への強い関心であった。

店内ではコーヒーの粉の入れられた布製のソックスに熱湯が注がれ、抽出されたコーヒーはポットに貯められて、陶器のコップで客に出された。グリルではパンが焼かれ、カパと呼ばれる甘いココナッツジャムを添えて出された。カンブンのイメージを人々に最も強く呼び覚ますコピ・ティエムのコーヒーは、街中のどこのコーヒーショップでも見られたカンブンの日常の風景であった。人々は一日の始まりをこうしたコピ・ティエムの軽い朝食で済ませ、仕事にあぶれた成人男性とティーンエージャーは一日の大半をここで過ごした。今日、シンガポール華人の気質を表すとされる、利益を失うことを恐れるという意味の福建語の「キアソ」は、コピ・ティエムでの暇を持て余したギャンブルのなかから生まれた言葉である。熱帯のけだるい午後には、人々のうたた寝のうちに過ぎていった。

いつも夜九時になると福建語の私営ケーブルラジオのドラマが、テレビ登場以前の大衆娯楽として人気を集めていた。週に五回放送された30分の勸善懲惡の番組は大音量で店内に流れ、人々はコーヒーをすすりながら聞き入っ

た。ラジオが終わり、10時ごろにはやっとコピ・ティエムの一日の営業が終わった。

コピ・ティエムで過ごしたりラックスした日々の思い出は、放任主義の植民地体制下でなかば強制された失業と不完全雇用によって生み出されたものであった。ともに過ごしたコピ・ティエムでの経験は人々にコミュニティへの強い帰属意識と連帯感を作り出した。HDBが創設された1960年の失業者数は13.5%に及び、人口の50%以上がこうしたコピ・ティエムのある都市の村に住んでいた。

HDBは、1960年から70年の10年間で、毎年一万戸ペースで低コスト住宅を供給しつづけた。最初の5カ年計画では中心部に住む125万人の都市の村の住民が移転の対象となった。特に中心となる100から500シンガポール・ドルの月間世帯収入の人たちの移転は政府の緊急課題だった。都心から6から8キロの郊外に建設された20階建の高層団地への移転は、政府の唯一の選択肢だった。一部屋タイプでキッチンとトイレが共同の「緊急」賃貸フラットは、月あたり20から60シンガポール・ドルの低家賃で提供された。住宅団地は戦後ヨーロッパの都市計画の概念となった「近隣住区」をモデルとしていた。近隣住区は都市の村には欠如していた近代的な生活設備を備える一方で、親族関係や近隣関係といったアジア的な共同体の社会構造を維持しようとした。1000から5000世帯が一つの近隣住区を構成し、そこには店舗や学校、診療所、コミュニティ・センター、運動場が整備され、近隣住区が一つの社会単位となっていた(糸林 2000: 102-125)。

住宅不足の最悪期を脱した1966年に都市再開発庁 (URA) が創設され、移住によって空洞化した都心部の再開発がなされた。このころには住宅の量から質への転換が図られ、居住を申し込む際の世帯の最小人員も五人から二人に減らされた。団地の設計プランにもゆとりが考慮され、空き地の造園や運動場、駐車場が予め計画に含められるようになった。一部屋タイプの緊急賃貸フラットから三部屋タイプの分譲フラ

ットが供給の中心となったのもこの時期である。1964年からは賃貸から自己所有へと住宅供給の重点が移された。

1970年代にはHDBは都市再開発のエージェントとして性格を改め、中産階級の住民がおもな住宅供給のターゲットとなった。ベドゥヤンモキオ、クレメンティでは四部屋タイプと五部屋タイプの分譲フラットが売りに出され、スイミングプールや複合スポーツ施設を備えたグレードの高い公共団地が出現した。

1980年代になるとブッキッ・バトッやタンピネスといった「ニュータウン」が現れた。団地の運営もHDB支部からタウン・カウンシルを通じた自主運営に切り替えられ、また団地の規模も1~5万人から15~25万人の大規模なものとなった。団地の規模拡大によって公共施設はいっそう充実し、HDBの団地に混じって住宅都市開発会社 (HUDC) の団地も見られるようになった。HUDCの供給したフラットはより高級なもので民間の高級コンドミニアムと遜色ないものだった。このようにHDBの推進した全国公共住宅プログラムは、独立からわずか30年たらずでシンガポールの全人口の五分の四を高層団地の住民へと転換していった。

では急速な工業化と経済成長によって可能となったHDB団地における日常とはどのようなものであろう。

早朝の団地で最も早く活動を始めるのはマーケットへの配達の手車である。朝五時には店舗の開店に向けての準備が始まる。新聞配達の手車も団地のブロックごとに新聞の束を置いていく。7時前になると住民の姿が目につきだす。母親や祖母に付き添われ7時半から始まる学校へと急ぐ児童。バス停へと急ぎ仕事に向かって出発する人々。だがその姿は以前のカンブンとはずいぶん違ったものである。児童の着るスポーツウェアは、色とスタイルによって学校が識別できる。有名校に通う子供はどことなくカバンが重たそうである。教育が唯一の階層移動の道となった現在、子供たちの通う学校は両親の特別な関心の対象となる。職場へと向かう大人たち

も、ブルーカラーは、Tシャツにジーンズかスカート姿。Tシャツには雇用主からの贈り物であることを示すスポンサーの広告が大きく入っていたりする。彼らはオートバイや日本製のミニバン、バスに乗って仕事場へと向かう。それに対してホワイトカラーは、男性はワイシャツにネクタイ、女性はブラウスにスカートのビジネス・スーツである。彼らの服装から組織のなかでの地位を言い当てることも不可能ではない。彼らのうち少数は当地ではたいへん高価な自家用車で出勤する。また若干数の人々は自家用車を持つ人との相乗りである。毎日混雑するバスでの通勤をできれば自家用車であるというのが共通の願望である。

子供と通勤者たちが団地を後にすると、主婦の姿が目につくようになる。マーケットへと向かう主婦の服装にも相違が見られる。中高年の華人は、だぶだぶのパンツと組み合わせた中国衿の短いブラウス姿。若年層ではシャツにショートパンツ。マレー系とインド系ではレーヨンかポリエステル素材のマレー服とインド服である。どの人も薄いピンクか白のビニールバッグを手に提げている。それぞれのサイフの懐具合によってマーケットに行く時間帯が異なる。余裕のある人は新鮮な食品を目当てに早くから買い物に出かけ、食費を切り詰めている人は腐りやすい肉や魚が値下げされる閉店間際に合わせて出かける。彼女たちが家に戻った正午前には団地の人通りも少なくなる。

午後3時ごろになると団地の地階のボイドデッキと呼ばれるピロティに中高年の女性たちがおしゃべりに集まってくる。そうした人たちのためにピロティにはコンクリート製のテーブルが用意されている。ここでおしゃべりをしたり、トランプをしたりして、夕食の準備が始まる四時半くらいまで過ごす。ボイドデッキは彼女たちの社交場である。

午後5時には職場から帰宅する人々の姿が目につくようになる。夕食までのひと時をサッカー、バスケット、バドミントンなど、運動場で遊ぶ子供たちの姿が見られる。午後6時ごろ、

学校の午後部の生徒が帰宅途中で道草をしながら家路につく。

団地の家々に明かりが点り、夕食時は家族がそろう時間である。夕食後、再び中高年の女性たちがボイドデッキの集合場所に集まってくる。昼間見かけなかった男性の姿も現れる。それぞれ性別や世代ごとに細かくグループが分かっている。若い人になると自宅でテレビを見にくつろぐことが多いため、ボイドデッキへはあまり降りてこない。テレビの連続ドラマの始まる夜九時半には、人影がまばらになっていく。

1970年代に政府が達成した完全雇用がウィークデーの団地から成人男性の姿を消した。彼らは週末になると姿を現す。公共教育システムの導入によって子供とティーンエージャーは団地の通路から消えていった。2年半のナショナル・サービスも徴兵された若年男性の姿を消すことになった。現在、公共住宅団地の空間でカンプンのな路地の雰囲気を感じられるのは中高年人たちのボイドデッキのミーティングくらいである。

就業機会の拡大は生活水準の向上をもたらしたが、雇用された部門や組織でのランクごとに所得階層に大きな分化をもたらした。方言や出身地ごとに分化していたカンプンとは異なり、現在ではそれぞれの世帯の所得水準ごとに分化したライフ・スタイルを持っている。人々の日常にはこうした所得階層による分化と年齢・世代による分化が強く見られる。

カンプンではあたりまえに見られた、すべての年齢層の人たち一度に集まる機会がなくなった。特に若者は、ボイドデッキではなく、ショッピングセンターの廊下かファーストフード店の出入りに集まってくる。タウンセンターで必ず見かけるマクドナルドは、自宅の居間でもなく、仕事場でもない。また遊び場でもない。しかし、どこからともなく多くの人たちが集まってきたり言葉を変え、情報を交換し合い、自然なかたちで人々の新しいコミュニケーションが次々と生まれてゆく。仮に都市のサロン型空間とも呼べるこうしたファーストフード店は

HDBの高層住宅団地の孤立した居住空間のなかで物理的な接触を求める若者たちの個と個が出会い、情報を交換する癒しと想像の空間となっている。

4 社会的景観とストレス問題

まず「景観」とは欧語の *landscape*, *Landschaft*, *paysage*, *paesaggio* 等の訳語である。ここでの景観は一定の地域ないしは空間の現象的事態としておく。一方で類義する言葉のうち、環境とは一定の地域ないしは空間の物理的事態であり、風景とは現象がより主観的である場合の景観である。自然環境と区別する意味で、また近代の景観はそれ以前とは決定的に異なることを考えることから、ここでは景観を社会的景観として問題にしたい(柄谷 1988: 20-33)。

ところで近代以前の農夫にとって岩や山は耕すことができないから醜い。このように経験を通して景観とかがかわるという意識がある間は、人間は景観とともに成長してきた。それに対して、工業化社会の人間は、技術的手段はあらゆる物をあらゆるところに造ってしまうことを可能にしたと信じている。それは、経験を通じた関係がすべて意味を失うことを表している(Relph 1991: 202)。生産労働から解放される場としての都市において、自然を客観的に考察する近代という時代は、人間が自然に働きかけるものとしての労働によって、人間は自然から解放され、そしてその自由において社会的景観としての自然の美への回顧が生じるのである。産業化に伴って都市の景観が人々に醜悪なものとなるに従って自然に逃避するようになった。その自然は、たとえばカンブンの場合、そのカンブンで労働する者がいわばリアルに経験するところとは異なり、物理的に同じものであっても都会人の見る景観としては何らかのロマン主義的な観念的要素を含んでいる。

次に社会的景観の問題をカンブンへの郷愁をめぐって展開された議論から見てみたい。1993年2月から4週にわたって、英字紙『ストレー

ツ・タイムズ』にカンブンについての連載記事が載った(The Straits Times 1993)。HDBによる全国公共住宅プログラムによってカンブンは物理的にはもう存在しない。ただ人々の共同の記憶のなかに生きているだけである。カンブンについての人々の言及は、新聞記事に載ったストレスレベルについてのマスコミのインタビューへのある住民の回答、「みんながカンブンの住人でなくなって、HDBフラットという小さなカゴのなかに閉じ込められるとき、いったい何を期待できるの?」という一言から始まった。

次の言及は、築65年を経過した精神病院の移転に際しての記事である。リゾートの地中海クラブのようにデザインされた病院への移転で、コメントを求められた看護師は病院の廊下から見える団地のブロックを眺めながら、「かつてここにはカンブンがありました。夕方にはよく患者を散歩に連れ出したものです。何もせずじっとしているだけで、とてもリラックスできるところでした」。

同様の意見は議会でもみられた。ある国会議員は、「シンガポール人はコーヒーショップなしの環境で暮らすことにとっても不安を感じている」と述べ、その機能を現代の公共住宅団地でも維持することが提案された。もしファーストフードのチェーンが近隣住区の既存の「イーティング・ハウス(食堂)」を駆逐するなら、フィッシュボール・ヌードルやロティ・プラタといった伝統食はハンバーガーやフライドチキンに置き換わってしまうとの危惧からである。彼はコーヒーショップとイーティング・ハウスを交換可能なものとして取り上げた。だがカンブンのコーヒーショップと近隣住区のイーティング・ハウスはまったく異なった制度である。前者の破壊によって、後者をファーストフード化した伝統食を効率的に提供するセルフサービスの食堂として出現させた。その背景には前述の日常生活の変換があった。

人々のカンブンへの郷愁は、メディアのなかで取り上げられ顕在化することで、産業社会の

容赦のない競争によるストレスレベルの上昇という政治的な言説となっていた。カウンセリング・ケア・センターの相談員は、政府による日常生活のバランスを犠牲にした物質的な繁栄の追及が、国民のストレスと疾患を招いているとして、優秀さへの努力を強調する国家の目標を政府は再考する必要があると述べた。

一連の新聞記事は政府のすばやい反応を引き起こした。厚生・教育担当国務大臣のアライン・ウォンは、ストレス言説を流行を繰り返すファッションにたとえて、30年間ではたしてストレスが増加したのかどうかについて疑問を投げかけた。当時の人々は失業に苦しみつつ生活のために毎日14時間以上の労働に就いていた。それに比べて現在の暮らしはより快適であり、当時の失業こそストレスであったのではないかと。

その後の新聞紙上では、成人の17%が何らかの精神症状を訴えており、自殺者と自殺未遂者、離婚率などの公衆衛生上の指数が国際比較でも上昇しているとの記事が出た。記事を受けて厚生大臣は、シンガポール人は物質生活の向上の結果、ストレスに耐えうる「文化の許容力」を失ったのではないかと述べる。一連のストレスの政治化は1990年代の政府の言説に重要な影響を与えることになる。それは個人主義を助長してきた実用主義的な社会政策の見直しとアジア的価値への回帰である。

カンプンの「路地」の消滅は、物理的な都市開発によって消滅し、作為的な公共住宅団地「路地」の生成とともに蒸発した。日常生活のためのビジネスを行う人々は、もはや暇を持て余す時間的余裕を持っていない。この変換は社会を構成する身体や物財、情報の新たな空間への住み込みであり、それを通じて人々が従来とは異なる空間を通じて出会い、関係し、新しい社会的景観をつくり出していく社会変容の過程であった。

カンプンの景観は19世紀後半に確立したもののだが、1965年以降、急速に崩壊を示した。これは空間の「画一化」、「均質化」や「場所性の喪

失」としてたびたび言及されている。現代の景観は人々にとって、「よそよそしい没感情的な景観」、であり「自分から離れた無関係なところにあるもののように経験する景観」となったのであった。カンプンに表象される生活をともにする土地がそこに暮らす人々の共同性の媒介や表象とはならず、意味論上の喪失にさらされた路地の崩壊後の荒涼なのである。これはまた伝統的なコミュニティの拘束から自由な移住や職業選択の自由な場の成立と拡大の過程として見ることができる。

この崩壊の原因は一つには物理的環境自体の変化である。社会的景観について言うなら、それは基本的に「コスモロジー」の崩壊である。もはや本来的な意味は放棄され、個々の建築物が全体との関連を無視してそれ自身で完結したものとして作られていった。郊外に次々と建設されていったニュータウンは、そもそも初めからコスモロジーを創り上げることなど無視したものでしかなかった。思想的にそれを支えたのはモダニズム＝機能主義である。

都市の周辺に位置する自然景観も同様であった。自然もまた、都市計画によって効率性を原理として切り刻まれていったからである。現在についてみると、80年代までが景観の自明性をなお無意識的に覆い隠そうとしていた時代であったとするなら、そうしたことがもはやできなくなり、またもはやそうしようとしなくなった時代、景観がもう自明なものでしなくなった時代であるといえる。「風景」の成立である。

5 アジア的価値と家族価値

いわば絶え間ない経済成長を目標とした資本の論理によって二つの日常性は変換された。人々は人に遅れることを恐れ、休むことなく競争しつづけるゴールなきマラソンへの参加を強いられている。個人のレベルでは、競争社会からの脱落や失敗への恐れは、職場や学校でのストレスという言説によって個人が自己管理すべき対象として語られる。それが公衆衛生上の統計

データとして顕在化してきたとき、マスメディアが兆候を政府に伝達し、政府は西洋化の行き過ぎによる個人主義の問題として政治化していく。

ここで家族の持つ役割が再び見直されることになる。家族は堅牢な社会の建設のために、伝統的な文化的価値を維持し、子供を社会化するための主要な責任を担うものとされた。家族は個人と国家のレベル間の仲介項としてよみがえらせられ、国家の経済目標を達成するための重要な道具となった。そのため社会経済的な変化へのエージェントとなるのが家族に求められ、家族は近隣組織、宗教組織、自発的組織とともに社会問題の調停者としての役割を持たされることになった。

もっともこれまでも直接・間接に家族は社会政策として定式化された国家による介入を受けてきた。1957年の人口調査では、夫婦のどちらかの親一人を含んで入るが、64%の世帯が核家族に分類された。それ以外に、多くはないが一夫多妻の世帯も見られた。

1961年に議会を通過した「女性憲章」はこうした一夫多妻婚を禁止するものだった。当時の社会主義的な反植民地・反封建主義の政府のレトリックのなかで、女性の教育の向上と雇用機会の増大を名目に、この憲章は家庭領域での女性の従属的地位からの解放を指示した。またすべての社会領域で男女同権の原則を義務づけた。従来、非ムスリムの住民の間で、7つの婚姻形態が存在してきたが、とくに中国系住民に対して、一夫一婦制の婚姻制度を法律で規定することで「不道徳」な伝統文化の見直しをはかった。これは効率的な社会を目指すPAP（人民行動党）政権の実用主義のイデオロギーを具体化したものであり、国家の生き残りのために女性を労働力市場に導き入れ、多様な婚姻形態を持つ移民たちの慣習を統一された国民形成のプロセスに従属させた。この憲章の意味するところは、すべての非ムスリムの慣習的な婚姻制度をアングロ・カトリック主義の家族制度へ置き換えることであった。これが中産階級の英語

教育エリートによって構成されたPAP政権の最初の家族への介入の試みであった。

1966年にシンガポール家族計画人口委員会が設立されると子供は「二人で十分」政策が実施された。世界銀行のレポートをもとに策定されたこの政策では、1957年に4.4%に達していた人口増加率を抑制するために、第三子以降から分娩費用を値上げし、また児童の学校選択の幅を制限し、さらに第四子からは所得控除が受けられなくなった。1970年には妊娠中絶法と自発的不妊法が成立し、住民の雇用機会の増大と生活水準の改善を名目に人口増加率をゼロ成長とするための政策が続いた。

核家族の比率は急速に増大していった。1970年には72%、80年には78%、90年には85%に達した。公共住宅プログラムとともに実施された人口プログラムは、一九五七年時点で既に核家族が過半数を占めていたにもかかわらず、政策的に標準的な家族形態を核家族に誘導してきた。そのため結婚した若い夫婦が親世帯と離れたところに暮らすことがあたりまえとなった。政府は経済発展にとって、核家族以外の大家族や複合家族の形態は政策上の障害とみなしてきた。一般に開発途上国では親族の紐帯が年老いた両親や働けない家族を養う社会保障制度の代替となっているが、政府は家族形態を近代化することによって、世帯の貯蓄能力を低下させる伝統的な要因を排除し、国内の貯蓄率を上昇させようとしたのである。

政府の住宅プログラムの成功は、長期雇用を前提とした住宅ローンや退職プランをもとに、フラットの持ち家率の急速な上昇をもたらし、家族を巻き込んでいく。経済分野での能力主義の徹底のための競争的な教育システムは、若者をより高い教育認定の獲得へと駆り立てていく。子供を持つ家庭では、裕福かどうかにかかわらず、子供への教育投資に熱中した。住宅ローンを抱えての家計の教育費の増大は、女性をフルタイムの労働へと向かわせることになった。

1980年までに女性の地位は、特に教育分野で

顕著に向上した。識字率でみてみると、57年には34%であったのが、65年には65%に、80年には80%となった。また15歳以上の女性の労働参加率は、1957年では22%、70年では29.5%、80年ではおよそ40%となる。女性は、教育水準の向上に支えられて、製造業を中心に労働市場に乗り出していった。その結果、働く女性は出産を延期し、また出産間隔を広げることで、ますます少子化の傾向は強まっていく（Census of Population 1990：5-7）。

人口増加率は1970年には2.8%、80年には1.5%にまで低下した。1960年代の初めから、政府は新設された工業団地に外国資本を呼び込むことで、低コストの労働集約的な部門で多くの失業者に雇用を生み出した。経済成長率は、1965年に15%、70年と74年には20%にも達した。1970年にはほぼ完全雇用を達成することができた。だが1970年代後半にはいくつかの産業部門で深刻な労働者不足が問題となった。政府はこれまでの労働集約的な雇用拡大のための経済政策を見直す必要に迫られるとともに、「第二の産業革命」に向けて、資本集中的で高付加価値の産業の育成が緊急の課題となった。

ところが1980年になると、それまでの家族の近代化を目標にした人口プログラムが見直されることになった。まず結婚した子供世帯とその両親の世帯が同じ団地のブロックや近隣住居に入居できるように入居時の抽選システムが修正された。この変更は、核家族から拡大家族への回帰として見る事ができる。また独立より社会の近代化に傾倒してきた政府は、「アジア的価値」を主張し始めた。1979年の2言語教育に「母語」を導入することを提唱したゴー・ケンソーの教育レポートは、政府のイデオロギーの転換の前兆であったと見ることが出来る。1982年のオン・レポートで、中等教育の道徳シラバスに「宗教的価値」が加わった。その内容として仏教、ヒンドゥー教、イスラーム教研究と聖書知識、そして初歩的な儒教倫理の科目があった。

翌年の1983年、リー・クアンユー首相は独立

記念日の演説で、出生率の増加を目指す人口政策の転換を明らかにした。1980年のセンサスの分析結果を引き合いにして、40歳以下の女性の出生数を教育水準別にみると、教育を受けてない女性では平均三人、初等教育のみでは2人、中等および高等教育を受けた女性では1.25人であり、そこには「不均衡な出生パターン」が見られると述べた。教育ある女性、とくに大卒の女性が子供を持たない、あるいは未婚のままであることは社会の後退を招くとの主張であった。彼の演説は優生学的なものとして議論を巻き起こすことになった。

翌84年、子供の学校選択を優遇する「大卒マザー優先計画」が発表された。コミュニティ開発省に社会開発部（SDU）が設置され、大卒女性の結婚を政府が後押しすることになった。教育ある女性は優遇され、教育水準の低い女性は不妊手術を受けることを奨励した優生主義的な人口政策は国民から強い反発を呼んだ。同年行われた総選挙では、PAPは初めて野党に2議席を譲り、得票数も前回に比べ13%低下した。国民の批判は政府のエリート主義的な姿勢から能力主義社会そのものに及んだ。翌85年、大卒マザー優先計画は撤回されることになった。

1987年、第一副首相のゴー・チュクトンは「新人口政策」を発表する。社会の高齢化が進むなかで望ましい子供の数は3人であるというものであった。第3子に対する学校登録の制限は廃止され、代わりに保育センターの充実が図られた。医療保険（メディセーブ）から第3子の出産への補助が行われ、第3子をもうけた両親へは三部屋タイプのフラットへの優先入居が約束された。

1993年には、ゴー新首相のもとで「小規模家族改善計画」が発表された。35歳未満の両親のうち教育認定がNかOレベル以下で世帯所得が月間750シンガポール・ドル未満のおよそ8千世帯を対象に20年間、年間800シンガポール・ドルの住宅補助と小学校から技術専門学校までの育英奨学金を与えるという計画であった。

家族規模の拡大を目指そうとする政府の意図は、少子化と高齢化が進むなかで、伝統的な家族のあり方をうたうアジア的価値を主張することで、社会福祉への国家負担を減らすことにある。

1994年には、91年の『共有価値』(1991)白書に続く『家族価値』(1994)が発表された。「愛・思いやり・関心」、「互いの尊重」、「献身」、「子としての敬愛」、「責任」がその内容である。これは西洋の個人主義に対して、アジアの伝統、とくに家族の絆と共同の善を強調したものであり、その背景には儒教的社会システムからの家族制度の見直しがあった。もっとも親子間の絆を説く一方で、夫婦の平等と兄弟の友愛を主張したのは、多民族社会の文脈を考へてのことであろう。最終的に、家族価値の五つの徳は、最後の二つを「子としての責任」と「コミュニケーション」に置き換えられた。こうした変更にもかかわらず、家族価値は人々に宗教的な印象を与えた。

カンブンは、現在のストレスに満ちた人工的な日常生活とは異なる、失われた路地の記憶との結びつきを強くし、自然な路地の回復への願望として記憶の共同化のなかに生きている。しかし30年余りの間で、カンブンのコミュニティは実体としての都市の村から、想像のコミュニティへと変化した。

都市の村では、複数の個人が生物的な系譜関係とそれを表象する血を共同性の媒介として結びつくとき、そこに血縁的な原理によって結ばれた集合体が一つの社会の内部領域として成立する。同時に、ある土地を媒介にして共同性の表象として結びつくとき、同様の内部領域として現れる。このように血縁と地縁による互酬的相互性の関係は帰属する内部と帰属しない外部に分割される。

近代以前の都市とは、社会内の諸領域・諸集団の間の「交通」を媒介する場であり、複数の関係を組織する集権的な権力関係の中心であった。また都市は外部との交通に対して開いたものであると同時に、その都市の住民の間では閉

じた内部を構成する両義的なものであった。

それに対して近代の国民国家は、国土という均質で連続した空間として編成し、資本制はその内部で身体や物財や情報が自由に行き来することが可能な市場という交通空間として成立する。そこではそれまで都市という局地化された外部性と交通性が国民社会の全体へと広げられる。空間自体も特定の限定された内部空間である「場所」からより抽象的で無限定な空間へと変容するのである。この空間からの解放は、血縁や地縁と結びついた地域的な社会組織の集団的な規制からの自由を意味する。HDBによる公共住宅団地の開発と人々のそこへの住み込みは、それまで社会を秩序づけ構造化していた土地や空間の社会的景観を解体し、同時にそれを再形成する主体も個人や私的資本、国家、多国籍企業などへと複数化していった。

6 アメニティ論を越えて

現代の国民国家時代の社会的景観を否定的に捉えて、その克服をたとえば「場所性」の回復、「コスモロジーの復権」として、あるいは都市景観の「形態」性の回復、自然景観の修復・維持などが主張されることが多く見られる。社会的景観の問題を近代性の問題として捉え近代以前の景観の回復によって克服しようというものである。しかし都市景観については、たとえば残存するヨーロッパ中世の街並みの美しさを語る者は多いが、現実に都市を中世的なものに変えよという主張はまず見られない。部分的に中世的なものを導入しようという主張は見られるが、それが「引用」である場合はポスト・モダンの立場に、そうでない場合はモダンの立場に属することになる。

これに対して自然景観の場合は、保存(preservation)を説く者がいる。ここでは景観がひとつの全体として問題とされている。彼らは多くプレ・モダンの立場に分類可能である。一種の文化景観としての自然景観の「保存」を説く場合は、その対象がすでに近代のもので

あることが結構あるからである。人々は森林等にたいしてより強く「自然」を感じるのには実は近代の手が加わったものの方であるケースが多い。

現在、最も活発な論点はポスト・モダンの立場からのものである。この立場は現在という時代の在り様を、それまでの近代とは異なるものとして肯定するものである。社会的景観ということでいうなら、その基本は、自然にせよ都市にせよ景観を自由に享受するところにある。「遊戯的な楽主義」といえなくもない。これは近代的な二元論の徹底化の帰結でありながら逆に二元論を超えようとするものである。ある論者は東洋の非二元論的世界に見られる主観と客観とが未分離のままに風景に共存し、主観は美的に、しかも部分的にのみ風景を見るのに対して、別の論者はポスト二元論の観点から主観と客観は明確に分離し、ただ主観が己れをも対象化的に見ることによって客観と同一の風景内に共存できうることを主張する。

さらに美的快楽を求めようとする「アメニティ」への志向が今日強まっている。アメニティの用語法は一義的でないが、その歴史的経過から見て「安全」「衛生的」「利便」といったより物質的なものを核として、それに「美」「アイデンティティ」といった精神的なものが付け加えられていったものとして理解しておく。さて社会的景観問題においてこの主張は現在どうかたちで現れているのか。都市景観についてはたとえばヨーロッパの都市をモデルとして、広場、路地、街路、ファサード、バサージュ、ランドマーク、歴史的建造物といったことが論じられている。また自然景観についてはとりわけ森林の価値が説かれている。

ここでアメニティ論の主張を二つに大別しておきたい。一つはいわば生理的に考える立場であり、一つは文化的に考える立場である。まず前者は規範的主張であるが、モダンの正統派からすると機能主義の延長線上に位置する。そこでは、いってみればアメニティの生理的基礎が無意識的に求められている。必ずしもアメニテ

ィ論と局限できないが景観工学系の樋口忠彦(1993)、中村良夫(1982)などがそのその例である。中村(1982:103)は「道路の風景設計の最大のポイントは、道路をその場所の地形の起伏にうまくおさめることである」として、どのような構造がうまくおさまって心理的満足感をもたらすかを追求している。樋口(1993:53)には、日本のよい景観の構造的類型化や、さらに抽象的な「凸型景観と凹型景観」への大別別類型化がある。またデザイン系の小林重順(1994)や、衛生学的景観論なども重要である。

一方の文化的立場からは歴史的景観がアメニティ論としてよく論じられてきた。現在の景観のうちに歴史的景観が構成要素となっていることがアメニティを産み出すというものである。この立場は歴史的景観が知覚を超えた、いわば共同の記憶を呼び起こす文化物としてアメニティを産み出すという側面を重視する。そのメカニズムはアイデンティティという媒介項を持ち込んでこなければ説明できない。

この2つの生理的立場と文化的立場とは、あくまで理念的なものであり、実際には連続している。また、前者は個人的なものであるのに対して、後者は集会的なものである。そして、近代においては、その中核に国民的なものを含む。そういう国民的な文化景観を志向する立場は、機能主義とはまた別の傾向として、まさしくモダンである。さらにこの2つはともにアイデンティティが関わってくるが、景観をめぐる最大の争点は、実はこのアイデンティティの問題だといえよう。

伊東豊雄(1992)は現代の均質な景観をもった都市を、コンビニエンス・ストアに並べられた食品がすべて一様にサラン・ラップに覆われていることとのアナロジーで「サラン・ラップ・シティ」と表現しつつ、ポスト・モダン派のようにそこで遊ぶのではなく、「サラン・ラップの実体化、つまりあの透明な被膜にひとつの構造を与えること」を語る。しかしそこで求められる建築は、もはや旧モダニズムが求めたような機械とのアナロジーにおける「形態」その

ものではなく、「バーコード」のように、自らは全く形態的表現を持たず、きわめて単純な実体でありながら、多様な意味を発生し得るシステムとしての建築である。彼はそうした建築術をまさしく「バーコード・アーキテクチャ」と呼んでいる。

伝統を装った景観のステレオタイプがなお流通している。それはヨーロッパの美しい景観なるものには木組み家屋や牧馬場、水車小屋の製粉機、さらには中世の軍事施設も入っていて構わない。もしそうなら同じ人工物である送電線やアウトバーンもまた構わないのではなからうか。人工のものではなく自然が美しいと言うのなら鳥たちの多くはテレビ・アンテナを樹の枝に代わるものと見なすことを学習している。それなら人間は、たとえば発電所から消費者へ電流を運ぶ高圧線柱を、鳥と同様に森として体験することをなぜ受け付けられないのか。単に習慣の問題があるだけなのか。そうではなくて環境そのものの問題なのであろうか。そうであるとするなら、同じ自然である鳥たちが可能的にはすべてのものを自然とみなしうるとして、なにゆえに人間はそうでないのか。自然と人工の区別は、人間だけのものであり、むしろ自然の方が人工物なのではなからうか。

シンガポールにおいてはファーストフード店も若者にとってアメニティ空間となっている。ここから極論するなら景観はいまのままで十分にアメニティを満たしているということを想定できる。しかしその場合には景観はもはや景観ではなく一つの「風景」であらう。その意味ではヴァンキュラーな無名の庶民による社会的景観論を展開しなければならぬ。同時に「共有価値」、「家族価値」に示される政府の文化政策としての「アジア化」の動向も着目していかなければならない。

その時の調査法は、社会という行為と関係の広がりや集団や団体としてではなく、必ずしも集団や団体を構成するわけではなく、ある協働の連関のなかで身体が集まりが織りなす「場」や「状況」として捉え、その存立を可能にする進

退の集会的な関係の構造を明らかにすることが求められる。なぜなら比較的に入人口の流動性が低く、限定的な成員からなる伝統的な社会や孤立的な村落ならば、そこでの「住民」を対象として人々の意識や行為の構造と過程を従来の社会調査により分析することができよう。しかし現代の都市のように巨大でその内部の成員間で直接の面識が期待できず、日常的に外部の来訪者を含んだ広域的な関係の広がりをもつ地域を、あたかも一つの閉じた集団や団体のように調査して分析することは、都市のリアリティを隠ぺいするものであり多くの問題を含んでいる。ここに現代の都市人類学の課題がある。

注

- 1) 本研究は科学研究費補助金(課題番号11710174)による研究成果の一部である。
- 2) 1990年代の公共住宅団地の記述については、おもに1994年におけるベドック、ユーノス、ジュロン地区(～1995年3月)のフィールド調査によっている。

参考文献

- Basham, Richard
1978 *Urban Anthropology. The cross-cultural study of complex societies.* Palo Alto: Mayfield Publishing Company.
- Bott, E.
1957 *Family and Social Network: roles, norms and external relationships in ordinary urban families.* London: Tavistock.
- Chua, Beng-Huat
1995 *Communitarian Ideology and Democracy in Singapore.* London: Routledge.
- Committee on the Family
1994 *Singapore Family Values.* Singapore: Ministry of Community Development.
- Department of Statistics
1992 *Singapore Census of Population 1990: Literacy, Languages Spoken and Education.* SNP Publishers.
- Fox, Richard G.
1977 *Urban Anthropology. Cities in their cultural*

- settings. New-Jersey: Prentice-Hall.
- Geertz, C.
1960 *The Religion of Java*. Glencoe: Free Press.
- Hannerz, Ulf
1969 *Soulside: Inquiries into ghetto culture and community*. New York: Columbia University Press.
1980 *Exploring the City: Inquiries Toward an Urban Anthropology*. New York: Columbia University Press.
- 樋口忠彦
1993 『日本の景観』ちくま学芸文庫。
- 伊東豊雄
1992 「サラン・ラップ・シティの建築風景」『現代思想』9月号。
- 糸林誉史
2000 『シンガポール 多文化社会を目指す都市国家』三修社。
- Jacobs, J.
1993 The city unbound: Qualitative approaches to the city. *Urban Studies* 30: 827-848.
- 柄谷行人
1988 『日本近代文学の起源』講談社文芸文庫。
- 小林重順
1994 『景観の色とイメージ』ダヴィッド社。
- Leeds, A.
1994 *Cities, Classes and the Social Order*. R. Sanjek (ed), Ithaca: Cornell University Press.
- Lewis, Oscar
1968 *La Vida: a Puerto Rican family in the culture of poverty - San Juan and New York*. New York: Vintage books.
- Mitchell, T.
1969 *Colonizing Egypt*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中村良夫
1982 『風景学入門』中公新書。
- Relph, E.
1991 『場所の現象学』筑摩書房。
- Singapore Government
1991 *Shared Values*. Singapore: the Singapore National Printers.
- The Straits Times
1993 Feb-, SPH.
- 若林幹夫
2000 『都市の比較社会学』岩波書店。
- ヴェーバー, M.
1964 『都市の類型学』創文社。
- Young, M., and P. Willmott.
1957 *Family and Kinship in East London*. Middlesex: Penguin.